

---

# 僕は明日を知らないようで知っている

闇黒魔王

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

僕は明日を知らないように知っている

### 【Nコード】

N3575X

### 【作者名】

闇黒魔王

### 【あらすじ】

未来が見える昇はある少女出会う

僕にはもう楽しいことなんてないと思ってた。(前書き)

つまらないですが

ご了承ください

僕にはもう楽しいことなんてないと思ってた。

僕は中崎昇。

一応、高校2年生なんだけど不思議な能力が僕にはある。

それは未来が見えること。

本来そんなことを聞いて信じる人は余程僕を信用しているかただの馬鹿だ。

だけど、僕には未来が見える。

というか、半ば強制的に見えてしまう。

今日も秋晴れで清々しい1日が始まった。

僕にとって毎日なんてつまらない物でしかない。

だってもう次起こることが分かっているから。

便利な能力だって？

そんな良いものじゃない

できればあげたいくらいなのに・・・

そんな日常つまらない。

あの日が来てしまう前までは・

僕にはもう楽しいことなんてないと思ってた。(後書き)

疲れ果てた

もう書いてける自信がない

次は明日更新します

## 破壊少女(前書き)

結構長めです。

時間あるとき読んで下さい。

## 破壊少女

つまらないですが  
ご了承下さい

実は俺には両親はいないなぜなら俺がこの能力を持っていたからだ。

---

10年前

俺は小学校に通っていた  
当たり前のことだが．．

テストは常に100点だった

なぜなら未来が見えるから答えが分かかってしまう。

そんな能力を俺は良いものだと思っていた。

6

しかし現実には違っていた

未来が見える俺は気が狂ったのかと周囲から異質な目で見られていた

とうとう耐え切れなくなった親は俺を精神科の病院にぶち込み帰っ  
てくることはなかった。

---

「はあ．．．．．」

久しぶりにそんなことを考えたらとても陰湿な気分になって来た。

今なんで俺が高校に通ってるかって？

それは俺がある団体から援助を受けているから  
どこの団体かはわからない

あの親が俺を引き取ってくれと最後に頼んだらしい・・・

そんなことを考えているとなんだか目の前に女の子が一人立っていた。

「あの・・・昇さんです・・・よね？」

何なんだこの子は？

「突然ですがあなたを連れ出しに参りました。」

.....

「はっ？」

そう、なんで？

意味わからない。

連れ出すとかなんとかこの子はどうしたんだ？

「なんで俺を連れ出すんでしょうか？」

「あなたが支援を受けている団体からの命令です。あなたに拒否権



「はないの！」

言われるがままに近くの黒い車に乗せられる。

こんな道あったのかと思うような不思議な道を通ってビルに着いた。

「所長。無事保護してきました。」

そう扉に彼女が話しかけると自動で開いた。

「帰って来たみたいだねレナ。」

所長らしき人が話しかけてきた。

「はい。まだ奴らの手には渡っていませんでした。」

奴ら？

誰だよ奴らって。

「あのう……すいませんけど状況を説明してもらえませんか？」

所長らしき人が話し始めた。

「ああ、ゴメンね

私の名前はグリーテと言うものだ。」

「じゃあ、グリーテさんに聞きます。

なんで僕はここに連れて来られたんですか？」

グリーテは咳ばらいをして穏やかに話始めた。

「君は私達にとって必要になったという事だ。君が支援を受けていたこの団体は超能力育成所アルカディア・サイコという物だ。」

僕は一つ一つ確認しながら質問をした。

「なぜ僕が必要なんですか？」

「ある組織に立ち向かうためだ。」

「ある組織？」

「奴ら闇の眼フレッティ・ネオと戦う。」

それから問答が繰り返される。

そして分かったことは

- 1、闇の眼の奴らは超能力者を使って悪事を働いているらしい。
- 2、そのために僕を育成するらしい。

「でも僕は未来が分かるだけで腕力は全く皆無ですよ!？」

グリーテが安心した顔で言った。

「大丈夫。超能力者は念力によって物体にダメージを与えたりダメージを回復したりできる。」

レナが嬉しそうに言う。

「あなたは予知能力者なのよ。ちなみにアタシは瞬間移動能力者。」

するとレナが目の中の岩を指差した。

「はっ!」

ドガアアアア

後ろの岩が消し飛んだ。

「これが念力サイコキネシスの撃ツの使い方だ。」

「凄いでしょ!?!」

何なんだ……………

僕の地獄がここから始まった。

破壊少女（後書き）

次はいつになるかわかりません。

苦しい特訓（前書き）

早めの投稿。

## 苦しい特訓

あの日から高校もやめた。

アルカディア・サイコ

この超能力者育成所で訓練を受けている。

最初は嫌気がさしてしようがなかった。

でも・住む家は提供してくれたし。

高校もたいして面白くなかったから。

だから別に困ったことはなかった。

「はあっ!!!」

ドガアアアア

岩も砕けるくらい念力の使い方も馴れたものだ。

予知能力も自分が見ようとしない限りは見えず、見ようとすれば見えるくらいコントロールできていた。

「やあ」

グリーテが近寄ってくる

「今日は君に試験を持ってきた。この試験に合格すれば、君も正式に超能力者育成所の正式社員になる。」

正式社員の話しはだいたい聞いている。  
給料まで出るらしい・・・

「わかりました。受けます。」

グリーテに連れられて格闘技場と書かれた場所に来た。

「ここで君はうちの正式社員と闘ってもらおう。」

すると扉が開いて背の高い男が出て来た。

「俺の名前はカイラ。」

「では、私は別室で待っているから。  
グリーテは去っていった。」

「じゃあ、始めよう。」

カイラは槍を取り出した

「そんなのありかよ?」

「うるせー!」

おいおい正気かよ……………

苦しい特訓（後書き）

展開が全然わからなくなってきました。



試験（前書き）

なんだかバトル小説って感じですね。

## 試験

「俺には武器ないのかよおい！」

「それじゃないのか？」

カイラが部屋の隅を指差して言う。

そこには、剣らしきものが置いてあった。

「これって？あの時の」

---

### 1週間前

「なんですか、これ？」

「それは確かに見た目はただの剣にしか見えんが念力によって攻撃力があがる代物だ。」

「念力によって？」

「だから君の使い方次第ということだ。」

しかし、あまりこの剣を使いこなせるようになった訳ではなかった

---

「こいつを使えってことなのか？」

俺は剣を握りしめた。

「スキを見せすぎだ！」

カイラが突っ込んできたするとカイラの体が消えた。

「これが俺様の能力透明消音能力。」

名前の通り姿は見えず、足音すら聞こえない。

俺はハチマキで目を隠す。

「なんのマネだ！」

ハチマキで目を隠したのは未来を見通すときに今見ている景色と融合してしまわないためだ。

北西方向から槍による突き。

察知した俺は素早くよけ切り付けた。

「くっ・・・」

どうやら当たったみたいだ。

しかし、流れた血すら見えないなんて。

「ふんっ！ 図に乗るなああ！」

後ろに回ってからの攻撃

俺は後ろに向かって思い切り剣を突き立てる。

「ぐわあああ！」

これで良いだろ。

その頃、別室にて

「グリーテ殿もう良いのではないかな？」

「彼の力はここにいる4超神の誰もが認めるもの。誰も彼の正式社員採用を拒んだりしないよ。」

3人の男達が一斉に頷く

「いえ、勝負はまだわかりません。彼はすでにあまりのエネルギーを消費している。」

昇はその場に倒れ込む。

「くそっ！予知能力を使い過ぎた。」

予知能力はその強さ故に体力の消耗が激しい。

「ふんっ！どうやらまだ勝利の女神はお前に微笑んだ訳じゃないらしい。」

カイラが笑う。

確かにここで予知能力が使えないのはかなりヤバいだろう。

「なら！これでどうだ喰らえ！」

俺は指を切りそこから流れた血で周囲に円を描いた。

「それがどうした？笑わせるな！」

カイラが後ろから槍で切り付けた。

「くっ……」

「どうやら勝負あったみたいだな。」

カイラがまた攻撃を繰り返してきた。

「そこだ！」

俺は剣を突き出す。すると確かな手応えと共にカイラが目の前に現れた。

「なぜ俺のい．．た位置を．．見抜いた？」

「あんたの能力で身についた物は消えて見えない。だからあの周囲に撒いた血が消えた所がお前の位置って訳さ。」

「ふん、さすが．．だな。」

カイラは倒れた。

すると扉が開きそこから数人の女の人が現れ手当てをする。

「試験合格おめでとう。」

グリーテがこちらにやってきた。

「君は今日からアルカディア・サイコの一員だ。」

「でも、手当てしたとは言えなんでこんなに残酷な試験を？」

「そのくらいの残酷さがなくては生きていけないからだ。」

グリーテが深刻な表情を浮かべる。

「そんなにブラッティ・ネオは酷い奴らなんですか？」

「ああ、君には辛い思いをさせるがすまない。」

そう残酷な悲劇が幕を開けた。

今から気を引き締めないと。

試験（後書き）

うーん主人公がどんどん大人っぽくなってるとね。

今回は3日くらいしてからかな？

ちょっとゴタゴタがあったんで。

チーム分け（前書き）

正式社員になりました。



## チーム分け

今日は正式社員になって初めての朝。

「おっと！いけない、いけない。」

試験合格の証のバッジを付けてアルカディア・サイコに到着した。

ちなみにアルカディア・サイコから家までは歩いて30分くらいしか離れてない。

「おっはよー！」

レナが笑顔でこちらに挨拶してきた。

「お、おはよう。」

余りにも元気な挨拶に少し戸惑う俺。

そんなときにグリーテがこちらにやってきた。

「やあ、おはよう昇くんとレナ。」

「おはようございます。」

「あっ！！」

レナが急に叫んだ。

「どうしたんだよ？レナ。」

グリーテが静かに言う。

「今日はチーム分けの日なんだよ。昇くんが何班になるか楽しみだ。」

「

チーム分け？正式社員をグループに分けるのか。

レナが不安そうな顔をしているのが気になるけど大丈夫か？

「では、メインアリーナで会おう。」

そう言っているとグリーテは去って行った。

一応、レナに聞いてみるか。

「なあレナ、チーム分けってなんかあるのか？」

レナが答える

「あるもある！大アリよ！これで決まった班で1年間過ごすんだからね。」

1年間過ごす？

一緒にでも暮らすのか？

「過ごすって何を？」

レナは少し口調を荒げて

「任務を遂行する班よ！ろくな奴がいなかったら最悪よ！」

任務ってことはその班が何か依頼を受けてそれを遂行するってことかな？

「確かに良い奴と組みたいよな。」

「まあ多分アタシならどんな奴でも大丈夫だけどね！」

そんな会話をしながらメインアリーナに向かう。

「まあ、超能力者ばかりだから思ったほど人数はいないな。」



レナと一緒に。知り合いがいるのは安心するな。

「よろしくね！昇。」

「ああ、よろしく。」

「では、チームごとにミーティングをしておけよ！解散！」

こうしてチーム分けが終わった。

一体レナ以外の3人はどんな奴らなんだろう？

チーム分け（後書き）

キャラクターの名前がややこしい。

## ミーティング（前書き）

話してるやつの名前をいれておきます。

## ミーティング

とりあえず、チーム分けが終わりミーティングが行われた。

「よろしくね！」

レナが元気よく挨拶すると、

「元気なお姉さんだな。まあよろしく。」

クリフは大柄な男で後ろには大きなハンマーをぶら下げている。

「私の名前はライナよろしくね！」

ライナは昇に抱き着いてきた。

すると、レナがなんだか怒ったように間に割って入る。

「ちょっと、何やってんのよ！」

もう二人の間には火花が散っている。

これは大変そうだ。

「ううー、そういえばあの人誰？」

離れた所に一人たたずんでいる男がいた。

「多分、龍牙って奴だと思っただが。」

クリフが言う。

とりあえず、話しかけてみる。

「あの……龍牙さんだよな？」

「来やすく話しかけてくるな。」

冷たいやるうだな．．．．．  
昇「ミーティングって何するの？」

レナ「うーんと、とりあえずリーダーを決めないかね！」

ライナ「私がやりたくい！」

クリフ「いや、俺だろ。」

数分間言い合いをしていたがリーダーは決まらなかった。

龍牙「うっせえな！そんなにリーダーを決めたいなら、ここで闘って勝った奴がリーダーだ！」  
いきなり龍牙が叫んだ。

レナ「良いわよ！でも、怪我したなんてことになったら罰則よ。」  
確かにここで下手に闘ってしまえば怪我は免れない。

龍牙「なら、これならどうだ？」

龍牙がある機械を持ってきた。



## ミーティング（後書き）

なんだか本格的にジャ○プのパクリみたいになりました。

リーダーは誰？（前書き）

1日開きました。

すいません。

リーダーは誰？

リーダー決めをするために龍牙がある機械を持ってきた。

龍牙「これはサイコカウンターという機械だ。」

レナ「サイコカウンターって自分の超能力がどれくらい分かるやつよね！？」

龍牙「そうだ。これは、その最新型でかなりの数値まで計ることが出来る。」

的があつてその上に数値を出すボードみたいなのがサイコカウンターだ。

龍牙「俺は誰がリーダーだろうと知ったことではないからやらないからな。」

そこへ挑発をかけるようにクリフが言う。

クリフ「本当は自分が弱いのを隠してるだけじゃないのか？まあ、いい俺が最初にいくぜ！」

的に向かってクリフが攻撃を放つ。

ドガアアア

するとそのパワーを吸収するように取り込まれ、ボードの数値が変化する。

ピピッ

51000

ライナ「アタシだって！」

ピピッ

41000

レナが笑う。

レナ「アタシはあんた達より凄い数値を出してあげる！」

ドガアアアア

ピピッ

64000

レナ「これでアタシがリーダーで決まりね！」

クリフはがっかりしていたが。ライナはレナを少しだけ尊敬したみたいだ。

すると、いきなり龍牙が前に出てきた。

龍牙「リーダーは決まったみたいだな。しかし、さっきのクリフとかいう奴が言ったみたいに俺が貴様らより弱くみられるのはごめんだ。」

レナ「じゃあ、あんたもやりなさいよ！」

龍牙「……………良いだろう。」

龍牙がサイコカウンターの前に立つ。

龍牙「はああ！」

物凄い衝撃波が起きた。

ピピッ

190000

クリフ「19万だと!？」

龍牙「これで、力の差が分かったろう。このクズ共が！」

レナ「クズですって?ふざけないで!昇はあんたより凄いわよ!」

龍牙「あいつが?良いだろう。ならば昇やってみろ!」

なんでだ、多分レナが一番だと思っていたのに……俺じゃあ無理だろ……

クリフ「やめとけ、この馬鹿な女の言うことは嘘だ。お前じゃ無理だよ。」

レナ「うっ……ひっく……昇は強いから!」

レナが泣いている。

あんなにいつも俺に優しくしているんなこと教えてくれたレナを……

ドクン、ドクン。

昇「どけ。」

昇はクリフを弾き飛ばす。

龍牙「……………」

昇「はあっ！！！！！！」

ドガアアアア

ピピッ

すると、サイコカウンターが不自然な動きをはじめた。

ガッ、ガーピガガーガガピガガー

測定不能

推測超能力数値

300000以上

龍牙「……………」

クリフ「30万以上だと馬鹿な!？」

ライナ「信じられないなんて数値なの!？」

レナ「昇。やったよ!凄いや昇!」

俺はその場に倒れた。

レナ「昇?のぼる!」

レナが駆け寄る。

すると、後ろから龍牙がやってきた。

龍牙「どけ。」

龍牙はそういうとレナを押しつけ昇を抱き抱える。

レナ「ちょっと！昇をどうする気？」

龍牙「安心しろ。医務室に運ぶだけだ。」

龍牙はそういうと、医務室へ向かって行く。

-----

数時間後、医務室にて。

昇「はっ！………ここは？」

レナ「昇！おはよう！」

レナは俺の手をずっと握っていたらしく、その隣には龍牙とグリーテがいた。

グリーテ「レナ、すまないが席を外してくれないか？」

レナ「やだ！私も一緒に聞く！」

龍牙「いずれ知ってしまうことだ。昇もこいつを信頼してるようだし、良いんじゃないか？」

グリーテは渋々首を縦に振った。

グリーテ「昇くん。君の中には鬼人きじんがいる。」

昇「鬼人？」

龍牙「お前は選ばれたということだ。」

さっぱりわからない。

鬼人とはなんなんだ？



リーダーは誰？（後書き）

頑張れ昇！

ファイトだ昇！

鬼人(前書き)

短めですよ

m ( ) m

## 鬼人

鬼人とはなんなんだ。

そう思っているのとグリーテが口を開いた。

グリーテ「鬼人とはある選ばれた超能力者に宿ると言われるもの。」

レナ「てことは、昇は選ばれた超能力者って訳ね！凄いい！」

龍牙「だが、現実はそのはいかない。」

龍牙は鋭い剣幕でこちらを見ている。

龍牙「鬼人はとてつもないエネルギーを持っている。それだけなら良いんだが、奴は自らの意思を持っていてその持ち主の精神を破壊するかも知れない。」

レナ「精神を破壊するですって!?!」

グリーテ「鬼人を操るためには並の精神力では無理だということだ。」

鬼人、俺の中に存在する者。

昇は胸を押さえて、深く息を吸った。

昇「では、俺はどうすれば良いんでしょうか?」

龍牙「これからお前はトレーニングをする。」

昇「トレーニング？」

グリーテ「そう、これで君の精神力を鍛えようという訳だ。」

鬼人に勝つためにはやるしかない。  
ここは引き下がる訳にはいかない。

昇「やります！そのトレーニング。」

グリーテ「では、ついてきなさい。」

そう言われて付いていくと地下の中のトレーニングルームにやってきた。

グリーテ「さあ昇くん中に入って。」

言われるがまま中に入るとそこは不思議な景色が広がっていた。  
すると、突然力が抜けていった。

龍牙「ここは特殊な部屋でいるだけで念力を消費する。」

なるほど、恐ろしい部屋だ。

龍牙「いくぞ！お前のすべてをぶつける！」

龍牙と闘い、その中で鬼人を呼び覚まそうという訳だ。  
俺は剣を構える。

そして地獄のトレーニングが始まった。



鬼人（後書き）

昇の中の鬼人。  
次回覚醒！

龍牙の奥義（前書き）

昇と龍牙の対決です。

## 龍牙の奥義

トレーニングルームでは昇と龍牙が闘いを続けていた。

昇「はあ、はあ。」

龍牙「まだこの程度で参ったと言う訳ではないだろうな。」  
龍牙は余裕を見せて昇に向かってくる。

昇「龍牙が自分の力をまだ完全に見せていない事は分かってる。」

龍牙「だが、完全な力を見せればお前は一瞬でやられるぞ。」  
すると、突然龍牙は後ろから巻物を取り出す。

昇「なんだ、それは？」

龍牙「俺の能力を見せてやろうか？」  
龍牙は巻物を開いた。  
すると、そこには龍の絵が書いてあった。

昇「龍の絵？そんなものどうするんだ？」

龍牙「俺の能力それは、げんそうぐげんかのうじやく幻想具現化能力。」  
そう言うと、巻物の中の龍の絵に手を置く。

「ゲガアアアア！！」

その巻物の中から龍が飛び出してきた。



龍牙「これは、幻術などではない。念力によって形作られた現実の龍。」

どうやら幻想具現化能力というのは思い描いた絵を現実化する能力らしい。

龍牙「ゆけ！」

龍牙は龍を操り、昇に攻撃をしかける。

昇「くっ………」

昇は龍を必死で避ける。

しかし徐々に間合いを詰められる。

昇「こうなれば！」

龍牙「今更何をしようと思駄だ！」

龍が襲い掛かる。

その、瞬間昇が攻撃を予知して避ける。

龍牙「なるほど、貴様を倒すためには龍1匹では倒せないらしい。」

昇「まだ増やせるのかよ!？」

龍牙「知っているか?超能力者はその超能力を完全に使いこなすことができたとき新たな技を習得できる。」

昇「新たな技だと?」

龍牙「そう、今見せてやるっ！超奥義、九神龍撃。きゅうしんりゅうげき」

すると、龍が九つに分身した。

「グガアアアア！」

「キギヤヤア！」

「ガアルル！！」

昇「なんてこつた……………」

龍牙「この数で攻撃すれば予知しても避けきれまい。」

九体の龍が一斉に襲い掛かる。

昇の体を龍達が次々に傷つける。

昇「くそお……………」

龍牙「さあ！このままなら勝ち目はないぞ！」

確かにこのままでは勝ち目はゼロだ。

その時！

突然昇が倒れた。

龍牙は龍の攻撃をやめさせる。

龍牙「始まったようだな。覚醒が……………」

—————

こじは？

昇は暗闇の中に一人立っていた。

昇「どこなんだ？ここは一体？」

ゴーン！ゴーン！

向こうから耳をつんざくような音が聞こえてきていた。

昇「なんだろう？」昇はそちらへ向かって行く。

ゴーン！ゴーン！ゴーン！

音はどんどん大きくなっていく。

昇「なんだかとてもない威圧感だ。」

音のある方に向かっていくと、巨大な扉が現れた。

「そこにいるのは誰だ？」

扉の向こうから声がする。

昇「人に名前を尋ねる時にはまず自分からだろ。お前は鬼人か？」

「いかにも、我が第三の鬼人。時の鬼人サイトリコ。」

昇「第三？時の鬼人？他にも鬼人がいるのか？」

時の鬼人「貴様なにもわからないようだな。良いだろう教えてやる  
う鬼人のことを。」

鬼人のこと？

なんなんだ一体？

時の鬼人「かの昔の事だ。ある場所に6人の人間がいた。その男達はすべて超能力者であり、恐るべき力を持っていた。」

6人の超能力か・・・

時の鬼人「6人の超能力は世界中をその力で守っていた。その場所に6体の鬼人がやってきた。それが、私達だ。」

昇「お前らは最初普通に存在していたのか？」

時の鬼人「そう、そして悪の能力を持った私達を6人の超能力者が封印した。」

昇「悪の能力だ！？ならお前らは封印されているべきだ！」

時の鬼人「確かに、そいかもな。その時の鬼人は6人の超能力者の能力を守るための守護神とされた。」

時の鬼人は守護神という事になっているらしい。

時の鬼人「そう6体の鬼人は滅、回復、時、空間、幻、秘の六つの守護神としてな。鬼人の力はとてつもないものだった。6体の鬼人は代々その力を受け継ぐに相応しい者の中に封印されてきた。」

昇「その一人が俺という訳だ。」

時の鬼人「そうだ。だから俺を解放しろ！！！」

扉の向こうからとてつもないエネルギーが伝わってくる。

昇「ふざけるな！そんな邪悪なエネルギーを解放してたまるかよ！」  
昇は扉の向こうに叫んだ。

時の鬼人「では、貴様が私を封印し続けられるとでも！？」

昇「やってやるよ！」

すると目の前の扉が開かれる。

時の鬼人「ならば、来いそして私と闘え！私の、私の渴きを癒せ！」

昇は扉に向かって突き進んだ。

龍牙の奥義（後書き）

時の鬼人覚醒！！

昇は勝てるのか！？

## 覚醒（前書き）

時の鬼人をサイトリコに変更します。

## 覚醒

扉を開けて進んでいくと不思議な異空間に迷い込んだ。

昇「でてこい！サイトリコ！」

すると、向こうから銀色の鎧を身にまとった怪物が現れた。

サイトリコ「来い．．．死にたいのならな！」

昇「はああ！」

昇は念力でサイトリコを攻撃する。

しかし、サイトリコはまるで分かっていたかのように避ける。

サイトリコ「私は時の鬼人。時の行方は我が手の内。」

昇「こつちにだって手が無い訳じゃない！」

昇は背中の剣を抜いて真っ直ぐに向かつて行く。

サイトリコ「馬鹿め！その攻撃など予測済みだ。」

サイトリコはそう言って攻撃してきた。

しかし、昇はそれを避けてサイトリコを攻撃した。

サイトリコ「ぐはあ！なぜ．．．私に攻撃を当てることが！？」

サイトリコはその場に倒れ込んだ。

昇「お前に俺の攻撃が当たったのは、お前が俺の攻撃を予測した後、俺が予知したのさ。」



サイトトリコ「くそお！！まだ、お前の勝ちではない。」  
サイトトリコはまた攻撃を仕掛けてくる。

昇「また、同じめに合うだけだ！」

サイトトリコ「果たして、そうかな？」

サイトトリコはニヤリと笑みを浮かべた。

サイトトリコの攻撃を避ける。そして、昇はサイトトリコを攻撃する。

しかし、サイトトリコはそれすら読んでいた。

サイトトリコは昇の攻撃を避けて攻撃した。

昇「やばい！」

サイトトリコ「終わりだ！死ね！」

昇「なぐんてな！」

昇はサイトトリコの攻撃を避けて、後ろから残るすべての念力を使い攻撃した。

ドガアアアア！

—————

その頃、龍牙は昇を見つめていた。

龍牙「そろそろか？」

そう龍牙が言った瞬間、昇が立ち上がった。

昇「グアアアア！」

龍牙「暴走が始まっちゃまった！」

龍牙は攻撃を開始する。

龍牙「行け！超奥義九神龍撃！」

九体の龍が攻撃を仕掛ける。

昇「ガアル！」

昇はとてつもない動きで龍の背後に回り込み、3体の龍を一気に倒した。

龍牙「なに！？」

昇は次々と龍を消し去って行く。

龍牙「早くしろ！昇。時間稼ぎもほとんどできねえ！」

-----

昇の精神世界

昇「やったか？」

サイトリコ「くっ．．．．．持てる念力のすべてを使った攻撃見事だ。私の力はお前の物だ。私の力を良い事に使おうと悪い事に使おうと貴様の自由だ。」

そう言うとサイトリコの体は消えていった。

昇「分かったぜサイトリ」。お前の力使わせて貰う。」

-----

その頃、すでに龍牙の龍はすべて倒されていた。

龍牙「ここまでか……!」

すると、急に昇が止まり倒れた。

レナ「昇!」

レナが入ってきて、昇に駆け寄る。

龍牙「まで!今、昇に近づくのはやめろ。もしかしたら鬼人に精神を支配されているかも知れない。」

レナ「昇が鬼人なんかにはやられる訳ないじゃない!」

すると、昇が立ち上がる。

龍牙は構えをとっている。

昇「……………ここは?」

レナ「大丈夫?昇だよな?」

昇はにっこり笑うと、

昇「ただいま。レナ。」

龍牙「どうやら鬼人にやられなかったらしいな。」

龍牙もほっとした顔をする。

昇「龍牙、今回は君の勝ちだ。あのまま闘っていたら、俺は負けて

いた。」

龍牙「今更、勝敗など取るに足りないことだ。」

昇「次は負けないからな龍牙!!」

龍牙「望むところだ!」

レナ「二人ばかり仲良くならないですよ!」

こうして、俺は新たな力を手にした。

-----

暗闇の中で何人かが話している。  
ここはブラッティ・ネオ。

「計画は進んでいるな?」

「YES!BOSS!」

まだ真の恐怖が近づいている事に昇は気づいていない。

## 覚醒（後書き）

ついにブラッティ・ネオが動き始めました。

**初任務（前書き）**

初任務の話しです。

きしこ

（…、四、）

## 初任務

今日も朝がやってきた。

昇「ふあああ〜」

昇は眠そうにベッドから起きて身支度をする。

レナ「昇〜？早くしてよねえ〜！」

なんだかよく分からないが鬼人の事件があつてから毎朝迎えにやって来るレナ。

昇「そついや、今日から任務が始まるんだっけ。」

そんな事を思いながら昇はレナと共に歩いていた。

そして、アルカディア・サイコに着いた。

レナ「まさかとは思うけど、初任務の内容分かつてるわよね？」

昇「……………何だっけ？」

レナ「あきれた。良い！今日の任務は護衛任務。ある人をヒライトシティまで送り届けるのよ。」

昇「ヒライトシティ？そこってこつから結構近いよね？」

レナ「私達みたいな初級者がそんな難しい任務が与えられる訳ないでしょ〜！」

まあ確かに、考えてみれば俺達よりも任務遂行に適任な人がいるだろうし、最初は簡単な任務で修行ってことか。

昇「でも、ある人って誰？」

レナ「私だって知らないのよ。ただ、とてつもなく偉い人らしいんだけど……」

レナが知らないなんてどういう事だ？

するとグリーテが向こうからやってきた。

グリーテ「やあ、今日は初任務だね。」

レナが疑問をグリーテに投げかける。

レナ「今日の護衛任務の依頼者って誰ですか？」

グリーテ「それなんだが……あの四醒天の一人なんだ。」

レナ「四醒天ですって!？」

昇「誰それ？」

昇は四醒天という者を知らない。  
そんなに凄い人なのだろうか？



昇「凄い人なの？四醒天つて。」

レナ「凄いも凄い！超凄い！このアルカディア・サイコの総統者の四人だよ。」

昇「そうなんだ……」

とりあえず、そこで話しは終わり、グリーテと別れた。

—————

数時間後

皆集合場所に集まっていた。

ライナ「ヤバい！ヤバい！まさか四醒天の一人なんて。」

龍牙「俺でさえ、四醒天の顔すら知らないのに何故？」

レナ「まあ、それだけ私達が優秀ってこと！」

クリフ「やべえ、緊張してきたぜ。」

すると、向こうから一人男が歩いてくる。

「君達が私の護衛をしてくれるらしいね。私の名前は四醒天のダイヤ。」

レナ「ダ、ダイヤさん！よ、よろしくお願いします！」

レナはそうとう緊張してるみたいだ。

ダイヤ「そういえば、この中に先日鬼人の封印に成功した者がいると聞いたが？」

昇は手を挙げて言った。

昇「僕です。」

ダイヤは少し笑って

ダイヤ「君か！君は試験も見させてもらったよ。他の四醒天も君の実力を認めていた。」

昇「ありがとうございます！」

昇は嬉しそうに言った。

レナ「では、行きましようか、ダイヤさん……いや！ダイヤ様！」

ダイヤ「ダイヤさんで良いよ。」

そして、アルカディア・サイコに着いた。

レナ「まさかとは思うけど、初任務の内容分かってるわよね？」

昇「……………何だっけ？」

レナ「あきれた。良い！今日の任務は護衛任務。ある人をヒライトシティまで送り届けるのよ。」

昇「ヒライトシティ？そこってこっから結構近いよね？」

レナ「私達みたいな初級者がそんな難しい任務が与えられる訳ないでしょ！」

まあ確かに、考えてみれば俺達よりも任務遂行に適任な人がいるだろうし、最初は簡単な任務で修行ってことか。

昇「でも、ある人って誰？」

レナ「私だって知らないのよ。ただ、とてつもなく偉い人らしいんだけど……………」

レナが知らないなんてどういう事だ？

するとグリーテが向こうからやってきた。

グリーテ「やあ、今日は初任務だね。」

レナが疑問をグリーテに投げかける。

レナ「今日の護衛任務の依頼者って誰ですか？」

グリーテ「それなんだが……あの四醒天の一人なんだ。」

レナ「四醒天ですって!？」

昇「誰それ？」

昇は四醒天という者を知らない。  
そんなに凄い人なのだろうか？

昇「凄い人なの？四醒天って。」

レナ「凄いも凄い！超凄い！このアルカディア・サイコの総統者の  
四人だよ。」

昇「そうなんだ……」  
とりあえず、そこで話しは終わり、グリーテと別れた。

-----

数時間後

皆集合場所に集まっていた。

ライナ「ヤバい！ヤバい！まさか四醒天の一人なんて。」

龍牙「俺でさえ、四醒天の顔すら知らないのに何故？」

レナ「まあ、それだけ私達が優秀ってこと！」

クリフ「やべえ、緊張してきたぜ。」

すると、向こうから一人男が歩いてくる。

「君達が私の護衛をしてくれるらしいね。私の名前は四醒天のダイヤ。」

レナ「ダ、ダイヤさん！よ、よろしくお願いします！」

レナはそうとう緊張してるみたいだ。

ダイヤ「そういえば、この中に先日鬼人の封印に成功した者がいると聞いたが？」

昇は手を挙げて言った。  
昇「僕です。」

ダイヤは少し笑って

ダイヤ「君か！君は試験も見させてもらったよ。他の四醒天も君の実力を認めていた。」

昇「ありがとうございます！」

昇は嬉しそうに言った。

レナ「では、行きましようか、ダイヤさん……いや！ダイヤ様！」

ダイヤ「ダイヤさんで良いよ。」

レナ「わかりました。」

そう、言ってヒライトシティへと俺達は向かって行った。

初任務（後書き）

今回はバトル系は無しでした。

すいません。

m ( \_ \_ ) m

ブラッティ・ネオの刺客グルーとモリア（前書き）

初任務で事件が！？



## ブラッティ・ネオの刺客グループとモリア

今日は初任務で四醒天の一人を護衛してヒライトシティまで送り届ける。

昇「しかし、今日も良い天気だな」

皆、それほど出発前の緊張は無いようだ。

初めはまともに四醒天と喋ることすらできなかったのに、今は積極的に喋りかけている。

レナ「ダイヤさんはどんな超能力を使うんですか？」

そういえば、四醒天ってどんな超能力が使えるんだろうか？

ダイヤ「内緒。」

ダイヤはにっこりと笑って言った。

まあ、確かにそんなに簡単に言えるものじゃないか……………  
レナも諦めて次の話題に花を咲かせている。

龍牙「呑気な奴らだ。全く……………」

クリフ「腹が減ったなあ、なんか食いたい！」

ライナ「何を言ってるのよ。ほんの2時間前に食べたじゃない。」

ライナは口調をきつめにクリフに言う。

クリフ「そうだけだよ。」

龍牙「ヒライトシティに着いたらいくらでも食べれば良い。」

クリフ「そうか！！！なら話しは早い！速く走ろっぜ！」

クリフは突然、元気になった。

ドガン！！！！！！！

昇「な、何だ！？」

龍牙「こりゃあ、何かあったみたいだな・・・。」

途端に皆の表情が変わる。

ダイヤもかなり真剣な眼差しで音のあった方向を見ている。

龍牙「今の俺達の任務は護衛任務だ。闘うのが目的じゃない！ここはひとまずここから離れよう。」

確かにそうだ。

ここで変な事件に巻き込まれる訳にはいかない。

ダイヤ「……………ここは行かねばならないようだ。」

レナ「何故？危険です！もしダイヤさんに何かあったら……………！」

ダイヤ「私の能力は遠隔透視能力<sup>えんかくとうしのうりよく</sup>。今あそこにいるのはブラッティ・ネオ！しかも、君達と同世代の者が闘っている。」

龍牙「確かに、そりゃあ行くしかなさそうだな。」

そして俺達は走り出した。

クリフ「しかし、俺達が行って勝てるのか？」

レナ「大丈夫！私達には昇と龍牙がいるから！」

俺だって鬼人と闘ってから何もしてなかった訳じゃない！  
やってやる。

龍牙「ふん！ブラッティ・ネオの奴ら好き勝手暴れやがって……………！」

すると森の中で何人かが話している。  
5人は傷だらけで立っていた。

「ちくしょう………」

ドサッ

「イーヒツヒツヒ！アルカディア・サイコの奴もたいしたことないな。」

「もう止めえかよ。やりたんねえぞ！」

龍牙「黙れ！この外道が……」

二人はゆっくりと振り向き俺らを見つめる。

「イーヒツヒツヒ！まだ獲物が残ってた。嬉しいねえ……来いよ八つ裂きにしてやるからよお！！！」

小柄な男は後ろに大鎌を抱えている。

「ふざけんな！グルー。お前はさつき散々やっただろ！」

大柄ないかつい男は鉄球を持っている。

グルー「シツシツシ……分かったよモリア。お前にやるよ。チッ！」

クリフ「こいつら、俺らを一人で相手にするつもりだぜ。」

龍牙「そのようだな。」

クリフ「ちくしょう!!ふざけんな〜!!」

クリフは後ろのハンマーを構えてモリアへと立ち向かう。

モリア「お前が俺様に勝てる訳ねえだろ!!」

クリフ「そりゃあどうかな?」

クリフは跳んで空高く舞い上がると、ハンマーがいきなり巨大化した。

クリフ「これが俺の能力だ。ぶったいへんけいのうりよく物体変型能力!!この巨大ハンマーで終わりだ!!」

クリフはハンマーを振り落とす。

ドゴオオオオ!

クリフ「やったか？」

しかし、砂煙の中からモリアが無傷で出てきた。

モリア「この程度で倒せるとでも？笑っちゃまうぜ！！」

クリフ「くそぉ！！」

龍牙「お前は下がってる。俺がやる。」

クリフは言われるがまま後ろに下がり、龍牙が前にでる。

モリア「なるほど、お前となら楽しく遊べそうだな。」

龍牙「残念だが俺はでくのぼつと遊ぶ趣味は持ち合わせていない。」

ブラッティ・ネオの刺客グルーとモリア（後書き）

キャラクタープロフィール

名前 中崎 昇

年齢 17歳

身長 170?

体重 63?

趣味 読者、筋トレ

好きな食べ物 海老

超能力 予知能力

## モリアVS龍牙(前書き)

連発投稿しました。

前回からプロフィールを描いてます。

そちらもお楽しみに！！

＼( )o( )／



## モリアVS龍牙

初任務でブラッティ・ネオの二人組に会い闘うことになってしまった。

モリア「ところで、お前の名は何だあ？」

龍牙「今から死ぬ奴に言う名前は無い。」

モリアは少し怒って鉄球で攻撃してきた。

龍牙はそれを避けた。

龍牙「付き合ってもらえんな！喰らえ、幻想具現化能力！」

龍牙は巻物の中から龍を呼び出した。

モリア「これはなかなかの座輿だな。」

モリアはニヤリと笑っている。

龍牙「座輿だと？その座輿にお前は今からやられるんだ。」

龍を操りモリアに連続攻撃していく。

ドガアアアア！

攻撃がモリアに当たった。

クリフ「やったぜ!!」

龍牙「いや、まだまだ!」

龍牙が叫ぶ。

モリア「これぞ、我が能力。こつてつかのうりよく鋼鉄化能力。」

モリアの体がまるで鋼鉄のように硬くなっていたのだ。

モリア「そして!喰らうがいい。

超奥義 てんじゆんかつ 転硬惨滑!」

モリアは体を丸めてボールのように転がってきた。

モリア「この鋼鉄化した体で回転すればお前などすぐぺちゃんこだ!しかも俺の意志で、方向はすぐに変えられる。」

龍牙は避けるので精一杯のようだ。

龍牙「くっ!」

龍牙はモリアの攻撃が徐々に迫ってきて、所々傷がついている。

龍牙「チッ!お前になんか使いたくなかったが。仕方ない、九神龍撃!」

龍が九体に分身した。

モリア「なかなかの技だが、無駄だ!」

モリアは龍に向かって攻撃を仕掛けた。

「グガアアア！」

龍がどんどん潰される。

そして、すべての龍が潰されてしまった。

モリア「これで、お前は追い詰められた。」

しかし、龍牙は笑っていた。

龍牙「おいおい、よく見るよ。全部倒してから俺のとこにい！」

モリア「なにに？」

モリアは回転をやめ後ろの龍を数える。

モリア「1・2・・・8!？」

そこには8体の龍しかいなかった。

モリア「ま、まさか・・・。」

モリアの後ろには龍がいた。

龍はモリアに炎を吐く。

モリア「くっ、これではいかん！」

モリアは能力を解いた。

龍牙「この時をまつた！」

潰れた龍がいきなり起き上がり一気に攻撃する。

モリア「ぐあああああ」

モリアはやられた。

レナ「やったあ！龍牙の勝ちだ。」

すると、龍牙がこちらへやってきた。

龍牙「俺の敵ではなかったようだな。」

クリフ「でも、何でモリアは能力を解いたんだ？」

不思議に思っけてクリフが聞いた。

龍牙「奴の能力は自分の体を鉄に変えるものだった。しかし、奴の弱点は龍の炎で体が溶けてしまうこと。そして奴が能力を解いた瞬間死んでいるふりをしていた龍が一斉に攻撃したという訳だ。」

ダイヤ「見事だ龍牙。」

龍牙「残る一人は頼むぜ、昇。」

昇「分かった。」



## モリアVS龍牙（後書き）

キャラクタープロフィール

名前・雪茶土 レナ

身長・157？

体重・そういう事をレディに聞かないでよ！作者！

趣味・日記（中身は絶対内緒！！）

好きな食べ物・苺

超能力・瞬間移動能力

レナ「しかし、レディに対してもうちよつと気の利いた質問ないの？」

作者「じゃあ、レナは昇の事好きなの？」

レナ「はっ？ば、馬鹿な事聞かないでよ！」

作者「いや、気の利いた質問かなって？」

レナ「う、うるさーい！う、う」

ドガアアアア

ズドオオオオオン

作者「いやあああ。すいませんでした」。



## グルーVS昇(前書き)

今回はグルーVS昇です。

サブタイトル見れば分かるとおり。

○ (^ - ^ ) ○



## グルーVS昇

やられたモリアを見て、グルーが言う。

グルー「生きてるか？モリアちゃん。」

なんとモリアが生きていたのだ。

モリアは苦しそくに笑いながら、グルーに助けを求める。

モリア「す、すまねえ、グルー……………ドジ踏んじま  
った。」

グルー「そうだねえ……………イーヒッヒッヒー！やっぱりゴミはゴ  
ミだったね。」

グルーは笑い出した。

敵でも仲間がやられたって時になんて奴だ。

昇「外道が……………」

グルー「ああ、外道で結構。お前らみたいな偽善者と同じになるな  
ら、外道が良いね。むしろ、シッシッシ。」

モリアはグルーに手当てをしてくれるように頼み始める。

モリア「すまねえが……………お、お前の念力……………で……………傷を治し  
……………てくれ。」

グルーはニヤリと笑う。

グルー「いや、お前は俺の生け贄になるんだよ。イーヒッヒッピ。」  
そう言うと、グルーはモリアの体に手を当てる。

モリア「や、やめてくれ〜!〜!」

その瞬間モリアの体からエネルギーがドンドン吸い取られてモリアは消滅してしまった。

グルー「これが、俺の能力。ねんりききゆうのうりちやく念力吸収能力だ。」

昇「なるほどな、ドンドン吸い取られてエネルギーの無くなった体は消滅するって訳か。」

グルーは笑いながら昇に言う。

グルー「お前もこの能力の前になすすべなく死んでいくのだ。ヒヤ〜ヒヤッヒヤヒヤ。」

昇「ならば、俺も容赦はしない!いくぞ!超奥義 ちようねんたいこうじゆつ超念体光術。」

すると、昇の体から光が出始め物凄い念力が体を覆う。

グルー「それが、どうしたって言うんだ?これで、終わりなんだよ!〜!」

グルーはエネルギーを吸収し始める。

レナ「ヤバい！昇のエネルギーがドンドン吸い取られていく。」

龍牙「なすすべなく死んでいく、確かにそうかもな。」

レナが怒って言う。

レナ「大丈夫だよ！昇の超奥義で勝てるって！」

龍牙が少し困惑した表情を見せる。  
それに対してレナも不安を覚える。

レナ「昇の超奥義って何なの？」

龍牙「俺にもよく分からん。ただ念力を放出しているだけに見える。」

その頃グルーは笑いながら勝利を確信していた。

グルー「もう、無駄だ！ここまでエネルギーを吸い取れば立っているのもやっとなはず。」

しかし、昇は笑っていた。

グルー「な、何がおかしい？ついに狂ったか？」

昇「何だよ、こんなもんか？期待ハズレも良いとこだぜ……」

グルーが怒った顔をして昇に言う。

グルー「貴様あ！！調子に乗るなよ！お前なんか一瞬で消せるんだからな！」

昇「やってみろよ。やれるならだけどね？」

昇は冷静さを常に保っている。

グルー「ならフルパワーで吸収してやるぜ。」

グルーはさっきの数倍のパワーで吸収を始める。

昇「終わるのはお前だ！！喰らえ！はああ！」

昇が念力を大量に放出する。

グルー「馬鹿め！自分で自分の首を絞めるだけ……ぐっ！  
？ぐあああ……！」

次の瞬間グルーは消えてしまった。

レナ「あれ！？グルーはどこに？」

龍牙「そついう事が……」

クリフ「何が起こったんだよ？」

昇がこちらに歩いてくる。

ダイヤ「見事だったね。念力を相手に吸収させ続けることによって相手の限界を超えた念力の力で相手を自滅させるなんて……」

その説明を聞いてやっと皆も理解したようだ。

ライナ「そもそもなんでブラッティ・ネオがこの付近にいたんでしよう？」

ダイヤ「分からないが、奴らもこの頃以前より派手に動いてきている。皆気を引き締めてくれ！」

全員が声を揃える。

「はい！！」

こうして、初任務はこのあと無事終了した。

## グルーVS昇(後書き)

キャラクタープロフィール

名前・虚働 龍牙

年齢・18歳

身長・184?

体重・84?

趣味・\*\*\*\*\*

好きな食べ物・チョコ

超能力・幻想具現化能力

作者「あのう……………趣味\*\*\*\*\*って何ですか？」

龍牙「俺がここでは言えないということだろう。」

作者「それは困るなあ……………ヒントだけでもお願いします。」

龍牙「良いだろう。よく聞け！」

作者「はい！」

龍牙「キャ○クラだ……………

「……嘘だ」

作者「やめて下さい!!真面目に勘違いするでしょうが!」

龍牙「仕方ない。俺の趣味は麻雀だ。」

作者「麻雀!?!」

龍牙「何か問題があるのか?」

作者「いえ、でも誰とやるんですか?」

龍牙「グリーテとやっていたら趣味になった。」

作者「そうですか……………」

龍牙「いでよ!!!」

「グガアアア!」

作者「何で龍を呼び出した!?!」

龍牙「今日は麻雀に負けて気分が悪い。気分転換はこれが一番!焼き付くせ!」

作者「ヤバい……………また!次回会いましょう!!!さようなら!」

龍牙「はーはっはは!」

作者「龍牙のイメージが崩れる。」

作者「そして、俺の部屋も崩れる〜!!!!」



**超能力授業（前書き）**

1日開きました。

今回は番外編みたいな  
（。。。）

## 超能力授業

俺らは今教室のなかにいる。

今日は月に1回の超能力授業の日だ。

龍牙「こんなもの受けなくともなんら影響ないというのに。」

昇「まあ、そういうなよな？俺は初めてなんだから。」

レナ「そういえば、昇は初めてだったね。」

でも、どんなこと教えてくれるんだろう。

昇は楽しみだった。

すると、教室のドアが開かれた。

グリーテ「おはよう諸君！！」

グリーテは何だか嬉しそうだ。

レナ「何か良いことでもあったんですか？」

龍牙がそこへ口を挟んだ。

龍牙「余計なこと聞くなよ。」

グリーテ「いや、龍牙君昨日はずいぶん勝っちゃってますまんね。」

龍牙「チッ!!」

どうやら何かの勝負で龍牙に勝つたみたいだな。  
一体なにで？

グリーテ「では、授業を始めるぞ。」

龍牙「……………」

龍牙はご機嫌ななめのような。  
さっぱり喋らない。

グリーテ「すまない龍牙君。こんど一緒にチョコレートパフェを私  
のおごりで食べに行こう。」

いくらなんでも龍牙をなだめるのにチョコレートパフェって……………

龍牙「……………仕方ない。」

昇「ええ!？」

龍牙って好きな食い物わかんないな。

グリーテ「とりあえず、龍牙の機嫌もなおったところで授業を始め  
よう。」

龍牙「早くしてくれ。」

グリーテは咳込んでから喋りだす。

グリーテ「では、まず超能力の種類について、教えていこう。」

昇「超能力に種類があるんですか？」

グリーテ「そうだ。超能力には大きく分けて三つの種類がある。」

超能力にも種類があるんだ。  
初めて知ったよ。

昇「どんなふうに分けられるんですか？」

グリーテ「うむ、まず1つ目は物体に作用する超能力。クリフの物体変型能力はその例だな。」

周りの物体に作用するやつだよな。

グリーテ「2つ目は自分や相手の人体に作用する能力だ。この前君達が闘ったグルーの念力吸収能力が例としてあげられる。そして最後に3つ目が脳内にイメージなどが写し出されるものだ。昇の予知能力はそれかな。」

レナ「でも、念力って攻撃や防御にも使えるけどそもそも念力って

何？」

龍牙「貴様はそんな事も知らんのか！」

グリーテ「まあまあ、龍牙君そういうな。念力というのは精神状態の中で生まれるエネルギーだ。」

レナ「精神状態の中？」

グリーテ「精神の感情や強さがエネルギーを生むんだ。感情といえは怒っているときに力がでるのも念力の一部だな。」

昇「そうなのか……………」

すると、教室にチャイムが鳴り響く。

キーンコーンカーンコーン  
キーンコーンカーンコーン

グリーテ「おや、時間のようだね。では、終わりにしようか。」

龍牙「よし、終わったなグリーテ……………もう一度勝負だ……………」

グリーテ「こんども負けないぞ。」

龍牙の趣味って一体？

超能力授業（後書き）

キャラクタープロフィール

名前・グロイド・クリフ

年齢・18歳

身長・200?

体重・110?

趣味・グルメ紀行

好きな食べ物・この世のすべての食べ物（野菜省く）

超能力・物体変型能力

作者「今日はクリフ君に来てもらいました。」

クリフ「いや、作者さんなんか腹減ったよ。」

作者「じゃあ、これ食べてよ。この前買ってきたの。」

クリフ「サンキュー！」

バクバク……モグモグ……ムシヤムシヤ……

作者「お話ししたいんだけど……」

クリフ「それも美味そうだな！食べるぞ！！」

作者「そ、それは失敗したと思って捨てようとした辛過ぎるお菓子  
．．．．．」

クリフ「か、辛い！！ぎゃあぎゃあ！」

作者「だから言ったのに．．．．．」

クリフ「でも、うまい美味い。」

作者「あなたは食べればなんでもいいんか．．．．．？」



愛の戦士登場!?(前書き)

新キャラクター登場!!

## 愛の戦士登場!?

今日もアルカディア・サイコで任務を探していた。

クリフ「しかし、なんか良い任務ないな。」

レナ「良い任務って言っても私達がやれる任務なんかそんなないよ。」

龍牙「だが、これでは雑用と変わらないな。」

昇「まあ、少しずつやっていくしかないよだろ。」

しかし、最初の任務が四醒天の護衛だったのに今やってる任務は本当に地味だよな。

グリーテ「やあ、おはよう皆。」

グリーテさんがいつの間にか後ろにいた。

ライナ「あ〜!グリーテさん!」

龍牙「何のようだ?」

グリーテ「面白い任務があるんだが……  
やってみないか？」

レナが目を輝かせて身を乗り出す。

レナ「何？やるやる！」

ライナ「任務は面白い訳ないでしょー！」

グリーテも少し困った顔した。

グリーテ「いや、じゃあやめようか。確かに君達にブラッティ・ネオ退治は早かったか……」

龍牙「ブラッティ・ネオだと！？それを早く言え馬鹿！！やる、やるぞー！」

クリフ「俺は嫌だな、あんな恐い奴らと闘うなんて……」

「」

レナ「何びびってんの？こっちには昇も龍牙もいるんだから大丈夫！」

龍牙に期待するのは良いけど、俺には期待しないで欲しい。

グリーテ「大丈夫だよまさか、ランク1の君達だけでは行かせないよ。」

ランクというのは俺達のチームレベルであり、最高が四醒天達ランク5である。普通は最高でもランク4が精一杯だ。

レナ「じゃあ、誰がついて来てくれるんですか？」

グリーテ「ランク4の最強戦士のベスト3に入る実力者だ。」

龍牙「どこにいるんだそいつは？」

グリーテ「あそこにいる人がそうだ。名前はローズという。」

そこには、長い赤髪の長身の男が立っていた。その男はこちらにやってきた。

ローズ「ううん、グリーテさん。」

グリーテ「なんだい？」

ローズは少し眉間にシワをよせている。

ローズ「僕はね、ローズじゃないよ。僕の名前は流れる血は深紅の

薔薇、正義を振りかざし現れる！！愛の戦士！！ヴィーナス！！」

ローズは何やら分からないポーズをとる。  
皆ポカンとして言葉すらでない。

龍牙「こいつがランク4だと言うのか？」

ローズ「君、失礼だよ。僕が君達を連れていくんだから、文句言わずについて来てくれないと。」

やってけるのかこの人と任務を……………

愛の戦士登場！？（後書き）

キャラクタープロフィール

名前・サイカラ・ライナ

年齢・17歳

身長・160？

体重・42？

趣味・ネイルアート

好きな食べ物・キムチ

超能力・心理読見能力

ライナ「ちょっと、作者さん私の出番少ないよー!!」

作者「うーん、超能力の心理読見能力って何に使つかわかんないから……」

ライナは作者の頭に手を当てる。

作者「何勝手に人のプライバシーを探ってるのー!!」

ライナ「今時ベッドの下なんて古臭いわね。」

作者「しかも、なんてもの見透かしてるの!？」

ライナ「出番増やさないとばらまくわよ!！」

作者「増やします!!!増やします!!!では皆さんライナさんの活躍をお楽しみに!!!」

ライナ「バイバイ。」

## ローズとの任務（前書き）

ローズはなんか痛々しいキャラクターやな。  
p ( , , q )



## ローズとの任務

この前、グリーテに紹介された任務をうけた俺達はローズと共にワライキアシティに向かっていた。

ローズ「はあ、僕だけで充分なのにさ。君達みたいなお荷物がついて来て最悪だね。」

レナ「なんですって！？あんとなんか私だって嫌なのよ！」

龍牙「貴様、ランク4だからと言って少し偉そうにし過ぎじゃないか？」

龍牙もうんざりしたようだ。

ライナ「まあまあ、皆やめなよ。ローズさんもそんなに意地を張らないでね？」

ローズはため息をつく。

ローズ「僕は意地なんか張ってないし張った事もない。だいたい僕の事はヴィーナスと呼べと言っているだろ！？」

ライナ「ヴィーナスって一体誰なの？」

その瞬間ローズの顔が曇る。

ローズ「そんな話はやめたまえ！！今から行くワラキイアシティではブラッティ・ネオが闇取引をしているんだ！！」

昇「でも、気になるんですよ僕ら。ローズさんの事も知りたいし……」

ライナ「私達だって今は仲間なんだから！！」

ローズ「……分かった。教えてあげようヴィーナスの事をそして私の憎しみの記憶を。」

数年前……

ローズの横に短い金髪の女性が立っている。

そこはサイキックロボというブラッティ・ネオの機械兵器がたくさんいた。

ローズ「ヴィーナス！！この数は僕らでは無理だ！引き返そう。」

ヴィーナスと呼ばれた金髪の女性が叫ぶ。

ヴィーナス「ここでは逃げられないわ！何とか倒さなくちゃ！」

ローズ「仕方ない……なら、行くよ！」

ローズとヴィーナスはサイキックロボを攻撃してなぎ倒す。

ドガアアアア！！

ローズ「な、なかなか数が減らないな……」

ヴィーナス「こうなったら私の超奥義でやるしかない！！」

ヴィーナスは構えをとり気を集中させる。

「超奥義！流出念力破。りゅうしつねんりきは」

ヴィーナスの周りに念力のドームが広がり辺りは火の海になる。

ローズ「よし！！これなら……」

その時！

サイキックロボの中から異常に強い念力を感じたローズがそちらを見る。

そこにはまるで悪魔のように黒く翼を生やした怪物が立っていた。

黒い怪物「……死ね。」

黒い怪物はとてつもないパワーの念力をヴィーナスに向かって発射した。

ローズ「あ、危ない！！避けるゝヴィーナス！！！」

しかし、ローズがヴィーナスの所に行く前にヴィーナスの体は念力の攻撃によって貫かれた。

ヴィーナス「はあっ！！くっ・・・・・・・・・・・・・・・・」

ヴィーナスはその場に倒れ込む。  
そこへローズが駆け寄る。

ローズ「ヴィーナス！！ヴィーナス！！死なないでくれ！頼む！」

ヴィーナス「は、早く・・・・・・・・に・・・・・・・・げ・・・・・・・・て・・・・・・・・」

ヴィーナスはそう言うどぐったりと動かなくなった。

ローズ「くそあ・・・・・・・・・・畜生！！！」

ローズは黒い怪物に攻撃を放つ。

スドオオオオン！

しかし、黒い怪物には一切ダメージは無かった。

黒い怪物「まだ……………いた。……………殺す。」

怪物が攻撃しようとしたその時。

「まちな、レオン！！早く帰らないと四醒天が来るよ！」

飛行機のようなものに乗った奴がそういうと怪物は降りたロープに捕まり帰って行った。

ポツンポツン  
ザアアアアア

雨が降り注ぐ中ローズは一人傷だらけで泣いていた。

ローズ「僕はブラッティ・ネオの奴らを許さない！例えこの命に変えてもあの怪物を倒す！」

昇「ローズさん……………」

龍牙「ならその復讐を手伝ってやると言えば文句はないだろ？」

ローズは龍牙を見つめて言う。

ローズ「やめたまえ。僕はもう……ヴィーナス以外の人間が死ぬのを見るのは耐えられない。」

すると、目の前に大量のロボットが現れた。

昇「なんだあれは？」

ローズ「あれは……サイキックロボ！ということは僕達の任務がブラッティ・ネオに漏れていた。」

ライナ「なら！やるしかないね。」

龍牙が前に出る。

龍牙「そうだな。では！ゆけい、幻想具現化能力！」

龍が現れサイキックロボ達を襲う。

昇「はああつ！！」

昇も念力で攻撃をする。

ローズ「ブラッティ・ネオに好き勝手はやらせない！げんかくしびたいのつりよく幻覚痺体能力！」

その能力のせいかサイキックロボの動きが鈍くなる。

龍牙「一気にキメる。超奥義 九龍神撃！」

サイキックロボのほとんどが龍牙の超奥義で碎けちる。

昇「やったな！」

しかし、いきなり昇達の近くに邪悪な巨大な念力が発生する。

龍牙「なんだ．．．．．この念力の馬鹿でかさは．．．．．？」

ローズ「これはあの時と同じ念力．．．．．まさか！！！」

そして、昇達の前に黒い怪物が現れる。

ローズ「お前がヴィーナスを殺した！！今こそお前に復讐する！」

## ローズとの任務（後書き）

キャラクタープロフィール

名前・ブラス・グリーテ

年齢・32歳

身長・184?

体重・70?

趣味・チエス、麻雀など

好きな食べ物・茶碗蒸し

超能力・火炎放出能力

グリーテ「うん．．．．困ったなあ．．．」

作者「どうしたんですか？そんな顔して。」

グリーテ「いやあ、なんか私ダメな奴みたいになってないか？」

作者「な、なっていないですよ！！確かにあんまり、所長とかそんな感じじゃないかもしれないですけど．．．．．」



グリーテ「私もなにか始めようと思うんだが、何をしようか？」

作者「じゃあ、ボクシングでもしますか？」

グリーテ「ボクシング？ボクシングねえ……………」

作者「何か僕、まずい事でも言いましたか？」

グリーテ「そっだ！うん、ボクシングやろう！そつと決まれば即行動！やるぞ〜」

作者「は、はあ……………ではおめでとうならー」

サイキックロボ (前書き)

1日空きました  
p (p、p)

## サイキックロボ

ローズとの任務の途中で現れた黒い怪物。

それは、ローズの相棒ヴィーナスを殺した怪物だった！！

ローズ「お前がヴィーナスを……………！！！」

昇「しかも、なんて念力なんだ……………」

龍牙「確かに凄まじいエネルギーだ。他のサイキックロボとはケタが違う。」

黒い怪物「……………我は……………サイキックロボ……………」

昇「サイキックロボ だと！？まさかこんなとんでもない怪物が作られているのか？」

「……………殺す。」

は念力破で攻撃してきた。

ドガアアアアア！！

昇「なんて念力破なんだ．．．．．こんなのもじやないが倒せない！」

は連続的に念力破を打ってくる。

ライナ「これはヤバイよ多分このままじゃ．．．．．この土地自体がぶっ壊れる！」

すると、後ろからアルカディア・サイコと書かれた車が走ってきた。

ローズ「増援か？しかしこいつ相手では誰が来ても意味がない．．．．．」

昇「確かにな．．．．．おりやああああ！」

昇が に攻撃を仕掛ける。

しかし、 には傷一つ付ける事ができない。

龍牙「くそがあ！！くたばれ！超奥義 九神龍撃！」

九体の龍が一齐に に襲い掛かる。

「．．．．．無駄．．．」

九体の龍はあっという間に によって破壊される。

そしてついに車が昇達の前で止まり、扉が開く。

ローズ「一体、誰が来たんだ？」

そこから降りてきたのはグリーテともう一人の男だった。

昇「グリーテさん！！そして、あなたはまさか！？」

そこにいた男は四醒天のダイヤだった。

ダイヤ「まさかこんな奴がここに居たとは……………」

グリーテ「ここは私達に任せてもらおう。」

「……………」

グリーテ「じゃあ行きましょう！ダイヤ様も。」

ダイヤ「いや、ここは私が一人で行く。」

龍牙「一人だつて！？無理だ！」

昇「いくら、四醒天でもあいつは強すぎる。」

ダイヤ「まあ、しぜんそつじゆつのもつりりやく後で話は聞いてあげるから。今は見ていてくれ。はあ！自然操術能力」

しかし、何も起きた感じはしない。

龍牙「まさか……………こけおどしか？」

ダイヤ「滅！！」

その瞬間、そらが曇り雷が落ちてくる。

ドガーン！！

「ぐっ……………殺す……………」

は念力破で攻撃してくる。

ダイヤ「確かに強い。だが、ひよっこだ！慚！」

嵐が吹き荒れる。

念力破が弾き返される。

昇「なんて力なんだ……………」

龍牙「俺達の想像を遥かに超えている。」

ダイヤ「サイキックロボ　なんてこんなものか？一気に終わらせよう！超奥義！来鬧懷刹」

すると、ダイヤの周りに8つの剣が現れる。

ダイヤ「この8つの剣は自然の中にあるエネルギーだ。炎、水、雷、風、地、氷、光、闇。」

ダイヤは周りの剣二つをとる。

ダイヤ「行くぞ！まず、炎と水！」

赤い剣を振ると が切り付けられ、凄まじい炎が を襲つ。

「グオオオオオ！！」

ダイヤは次に青い剣を振りかざす。

ダイヤ「ほれ水だ！」

が攻撃をくらい、水に巻き込まれる。

「グガアアアアア！」

ダイヤ「はあ、つまらんな。だが、最後に良いものを見せてやろう。」

ダイヤは構えをとる。

ダイヤ「冥土の土産だ！究極奥義！八滅<sup>はちめつ</sup>盾<sup>しけん</sup>剣<sup>けん</sup>罰<sup>ばつ</sup>！」

すると8つの剣が一斉に に向かっていき、 を取り囲む。





サイキックロボ (後書き)

紹介できるキャラいないですね”

それぞれの修行（前書き）

久しぶりの更新！

## それぞれの修行

サイキックロボ を倒した俺達はアルカディア・サイコに戻り医務室で手当を受けていた。

昇「グリーテさん、俺達の闘ったサイキックロボ みたいな奴がブラッティ・ネオにはたくさんいるんですか？」

グリーテ「いや、あんな凄いエネルギーを持っているサイキックロボを作るためにはそうとう労力がかかるからそろそろいるわけじゃない。」

龍牙「だが、奴で全部な訳じゃない。俺達はもっと強くならなくてはいけない。」

レナ「……………そうだね。」

皆ブラッティ・ネオの力を見て落胆している。

ダイヤ「そうだ。君達はもっと強くならなくてはいけない。だから、私と修行しよう。」

確かに今の力ではブラッティ・ネオに勝てる訳がない。

龍牙「俺はやるぞ！二度とあんな目にあってたまるか！」

クリフ「俺もだ！」

レナ「私だって！」

ライナ「私も!!」

昇「俺は………もつと強くなる。ならなきゃいけないんだ！」

ダイヤ「うむ、よし明日から修行だ！言うておくが私の修行は甘くないぞ！」

ライナ「じゃあ、そうと決まれば即行動ですね！」

ダイヤ「いや、明日から修行をするが今日はゆっくり休め。体調が戻るまでは修行はしない。明日に体調が万全ではない場合は延期する。」

龍牙「馬鹿な!?ブラッティ・ネオはもうすでに動き出してるんだぞ！」

レナ「そうだよ！いつ来るか分からないのにさ！今すぐやらないと。」

皆修行を早くやりたいようだ。

無理もない、ブラッティ・ネオが動き出した以上俺達も急がなくてはならない。

ダイヤ「まあ、君達が焦る理由も分からない訳じゃないが、大丈夫だブラッティ・ネオはまだ動かない。」

昇「どうしてそんなことが分かるんです？」

ダイヤ「奴らをまとめる総帥者がいないからだ。奴は2年後に戻ってくる。それまではブラッティ・ネオも派手にはあまり動けない。」

総帥者は気になるがとりあえずブラッティ・ネオが2年間の間動かないと知って安心した。

グリーテ「では、もう遅い時刻だから帰りなさい。」

そうして俺達は帰って行った。

---

## 1週間後

俺達は1週間の間体調が戻らず休んでしまった。

リハビリで念力の使い方の練習はしていたが、かなり体が鈍ってい

る。

昇「いよいよ修行開始だな！」

龍牙「1週間も体を休める必要など無かった！」

ダイヤ「とりあえず、体の方は万全みたいだな。ではついて来たまえ。」

俺達は普段は入れない場所に案内された。

ダイヤ「ここだ。」

そこには7つの扉があった。

ダイヤ「この中に入って修行をこなしてもらおうからな。」

龍牙が口をはさむ。

龍牙「7つ扉があるが俺達は五人だぞ!？」

ダイヤ「心配ない。お前達には二人の助っ人を用意した。」

レナ「助っ人？」

ライナ「誰ですか？」

ダイヤ「あそこにいるぞほら！」

ダイヤが指差した場所に立っていたのは赤い髪のローズだった。

ローズ「流れる血は深紅の薔薇。瞳の中には希望を。正義を振りかざし現れる愛の戦士ローズ！」

この自己紹介の仕方からして多分ヴィーナスの事は立ち直ったに違いない。

昇「あと一人は一体？」

バシツ！

クリフ「いてっ！だ、誰だ今叩いたの！」

バシツ！

レナ「いた〜い！！！」

昇「まさか！？か、カイラか！」

するといきなり昇達の前にカイラが現れた。

カイラ「よろしくな！」

ローズにカイラなんてとても心強い。

龍牙「カイラなんて試験の時に昇に負けた奴じゃないのか？」

昇「いや、カイラさんは本気じゃなかった。」

カイラ「知ってたのか。まあ、まだ超奥義の存在すら知らないお前に超奥義とかは使えないからな。」

カイラは少し照れているようだった。

ライナ「と、とりあえず修行始めようよ！」

ローズ「そうだな。」

ダイヤ「では、一人で扉を選び入れ。」

俺達は7つの扉を開き中に入って行った。

---

龍牙が扉に入る。

龍牙「一体どんな修行なんだ？」

すると、龍牙の目の前に龍牙とそっくりの人物が現れる。



偽龍牙「今からお前は自分と闘う恐怖を味わうんだ。」

龍牙「面白い。やってみろ！」

---

レナが扉に入った。

レナ「なにここ？暗いわね。」

明かりがつく。すると、そこには沢山の触手がついた機械があった。

ロボ「ワタシヲオセルカナ？」

レナ「楽勝よ！」

触手が一斉にレナを襲う

---

ライナの扉

ライナ「なんだか、薄気味悪いわね。」

突然、地響きと共に揺らめく幽霊のようなものがライナに襲い掛かる。

ライナ「きゃあああ！」

ライナがよける。

幽霊「……………」

幽霊は攻撃を連続に仕掛ける。

ライナ「こいつを倒せてことね。」

---

クリフの扉

クリフ「なんだ？なんか凄い音がする。」

ゴオオオオオ！

直径8mはあるつという鉄球が転がってくる。

クリフ「おいおい、冗談きついで！」

---

ローズの扉

ローズ「僕には簡単過ぎるかもね。」

ローズは余裕の表情だ。

ローズ「ところで僕の後ろにいるのは誰だい？」

「分かってたのか。」

ローズが後ろを振り向くとそこにはサイキックロボのような物があつた。

ローズ「まさか、こいつが何でここに・・・？」

「殺してやる。」

ローズ「何だか分からないがやるしかなさそうだな・・・」

---

カイラの扉

カイラは随分足場が悪い所に立っていた。

カイラ「なんて場所なんだ。下が見えないぜ。」

カイラの目の前に巨大な猛獣が現れる。

カイラ「あんなのところで闘うのかよ・・・」

---

昇の扉

昇は地面にはいつくばっていた。

昇「なんだ・・・・・・・・これは？ものすごい念力に上から押さえ付けられてる・・・・・・・・」

そしてそこに居たのは・・・・・・・・

昇「お、お前は！！」

それぞれの修行（後書き）

キャラクタープロフィール

名前・レッド・ローズ

年齢・20歳

身長・185?

体重・83?

趣味・午後のティータイム（真つ赤な薔薇を見ながらゆったりと）

好きな食べ物・甘い物

超能力・幻覚痺体能力

ローズ「僕は美しくありたいんだよね。」

作者「じゃあ、ローズさんは1番何に気を使っていますか？」

ローズ「気を使っている事と言えば、常に冷静沈着であることだな。」

作者「でも、ローズとの任務の時かなり取り乱してましたよね？」

ローズ「そ、そんな昔の事は忘れたまえ！」

作者「じゃあ、嫌な事がありますか？」

ローズ「あるとしたらこれが小説な事だな。」

作者「小説の何が嫌なんでしょう？」

ローズ「私の美しさが読者の皆さんに分らないだろ。」

作者「でも、やっぱり画にすると昇とかの方がカッコイイ気が……  
……」

ローズ「……幻覚痺体能力！」

作者「か、体が……動かない!？」

ローズ「無礼者はほつといてまた次回会おう！」

作者「戻してくれ〜！」



龍牙のプライド(前書き)

龍牙の修行!!

ついに覚醒



## 龍牙のプライド

龍牙の扉

龍牙と偽龍牙が睨み合っていた。

偽龍牙「いくぞ！」

龍牙「こい！」

龍牙が能力を使い、龍を呼び出す。

グガアアアアア！

偽龍牙「忘れたのか？お前と俺は同じなんだ。」

偽龍牙も龍を呼び出していた。

グガアアアアア！

龍牙「俺の分身か．．．．．偽物が本物に勝てる訳ないだろ！」

偽龍牙「本物とか偽物とかうるさい！強い方が本物で弱い奴が偽物だ。」

龍牙「ならばやってやるまでだ！」

龍と龍がぶつかり合い共に砕けちる。

偽龍牙「もう一回だ！」

龍牙「喰らえ！」

グガアアアア

ガアオオオオ！

また相打ちした。

龍牙「これではらちが開かん。一気にけりをつける！超奥義 九神龍撃！」

龍牙の後ろに九体の龍が現れた。

偽龍牙「確かにな。超奥義 九神龍撃！」

龍牙「なにっ！？」

偽龍牙の後ろにも九体の龍が現れた。

龍牙「まさか貴様も超奥義が使えるとはな……………」

偽龍牙「君よりも使いこなせるけどね!？」

龍牙「なら試してみやがれ！」

九体の龍同士がぶつかり合う。

ものすごい衝撃波が辺りを震わせる。

龍牙「ぐわあああ！」

偽龍牙「ぐっ・・・・・・・・!!」

砂煙で周りが見えない。

龍牙「なんだ!？周りが全く見えん。」

偽龍牙「良く見てみる。貴様の上を！」

龍牙は頭上を見る。

龍牙の上には一体の龍がいた。

龍牙「あれは・・・・・・・・・・・・俺の龍じゃない。」

偽龍牙「そう俺の龍だ!死ね！」

龍が襲い掛かる。

ドガアアアアア！

龍牙「くそっ！何故？俺の龍だけがやられたんだ一体？」

偽龍牙「お前よりも俺の方が念力の使い方が良いんだ。」

龍牙「念力の使い方だと・・・・・・・・・・・・・・・・！！？」

偽龍牙「そうさ、お前の九神龍撃は九体の龍全部にしっかりと念がこもってない。」

龍牙「貴様はすべてに念がこもっていると？」

偽龍牙「その通り、だからお前はやられるんだよ！その甘さでな！もう一度喰らえ。超奥義 九神龍撃！」

ガアオオオオオ！

龍牙「くっ・・・・・・・・・・・・・・・・くそ！超奥義九神龍撃！」

グガアアアアア！

ズドオオオオン！

またしても龍が一体残り龍牙を襲う。

龍牙「うおおおお！」

龍牙はもう一体の龍を出して相打ちした。

偽龍牙「よく凌いだな。褒めてやろう。」

龍牙「これで俺にも勝機があるな。」

偽龍牙「勝機だって？そんなのある訳ないだろ！お前は俺より沢山の龍を出している。その分念力を消費しただろ。」

確かに龍牙の負けは濃厚だった。

龍牙「くっ・・・・・・・・・・・・・・・・！！！」

偽龍牙「もう念力も少なくなるし、トドメと行くところか。」

龍牙「俺は負けん！」

龍牙はボロボロになりながらも立ち上がる。

偽龍牙「お前には余計なものがある。」

龍牙「余計なものだと？俺に余計なものなどないぞ！」

偽龍牙「それだよ！その以上な自信というかプライドというか．．．  
．．．．．うっとうしいんだ！！俺にはそんなものない！！  
いつでもマイペースに生きる。貴様などに負けはせん！」

龍牙「余計なプライドだと!？」

龍牙が震える。

偽龍牙「そうさ！お前のそのプライドが重しになっているんだ！」

龍牙「うおおお!!」

龍牙の周りに念力のオーラが見え始める。

偽龍牙「喰らえ！超奥義 九神龍撃！」

龍牙「超奥義．．．．．九神龍撃．．．．．」

九体の龍と九体の龍はそれぞれ闘い合い消滅した。

偽龍牙「．．．．．!!」

そこに龍はいなかった。

偽龍牙「馬鹿な！何故龍が残らない。」

龍牙「これで互いに念力の強さは同じ……………そして俺が勝つ…！」

偽龍牙「うるさい！」

龍牙「互いに超奥義を使えるのは後一回が最高。これでキメる！」

偽龍牙「ならお望み通りにしてやる！超奥義 九神龍撃！」

九体の龍が現れる。

龍牙「見せてやるぜ。貴様が余計と言ったプライドの力を！」

龍牙が念力を溜めはじめ。

偽龍牙「何故！？お前のどこにそんな念力が……………！」

龍牙「俺のプライドは余計じゃない！俺はどんな逆境にも屈指はしない！念力は精神のエネルギー。だから俺の精神とも言えるプライドを傷つけた貴様に対する怒りが俺のエネルギーになる！」

偽龍牙「ば、馬鹿な！」

龍牙「それに、この重しは貴様を殴るのにちょうど良い重さだ。見  
さらせ！究極奥義 十帝龍残潔じゅうていりゅうざんけつ！」

龍牙の後ろに黄金色をした龍が九体現れた。

偽龍牙「究極奥義だつて？ただ黄金色になっただけだろ！」

龍牙「いや、十帝龍残潔は十体目の龍がいる。」

そう言うと、十体目の龍が呼び出され龍牙と同化する。

龍牙「十体目の龍はこの俺自身だ！」

龍牙は龍の紋章が入った鎧を着て立っていた。

偽龍牙「チツ！い、行け行くんだ！」

偽龍牙の龍は襲い掛かる………が、龍牙の  
九体の龍にやられてしまう。

龍牙「貴様を今からぶつた斬る！」

龍牙は二刀の剣を持って偽龍牙に飛び掛かる。



偽龍牙「くそがああ！」

偽龍牙も念力破を繰り出し対抗する。

龍牙「そんなものが効くわけないだろ！」

偽龍牙「そんなはずは、やられる！」

そして龍牙が偽龍牙を切り裂く。

偽龍牙「ぐわああああ！くっ……り、龍牙……み、見事だ。やはり、お、俺では勝てなかった。」

偽龍牙は光を帯びて消滅した。

龍牙「貴様も俺の人生の中の強敵だった……」

龍牙のプライド（後書き）

キャラクタープロフィール

名前・トリスナ・カイラ

年齢・18歳

身長・176?

体重・70?

趣味・ゲーム（RPG）

好きな食べ物・餃子

超能力・透明消音能力

カイラ「どうするか？」

作者「何をですか？」

カイラ「ここで何を話せば良いのか分からん。」

作者「では、キャラクターに質問のある方は感想またはMailで  
どしどし応募下さいー。」



発動！レナの超奥義！（前書き）

かなり開きました

発動！レナの超奥義！

レナの扉

レナはたくさんの触手のついた機械を目の前に立っていた。

レナ「何だか得体の知れない感じがするわね。」

すると機械が作動して、たくさんの触手がレナに襲い掛かる。

レナ「こんなの当たらないわよ！」

レナは瞬間移動能力を使い触手を避けていく。

レナ「とりあえず、こいつを倒さないとダメね。」

レナは念力破で触手を攻撃して破壊する。

ガガアガガカガガガーガガカ！

ドガン！

なんと破壊された触手が再生して元に戻ってしまったのだ。

レナ「再生するなんて聞いてない！」

レナは機械を観察して弱点を探す。

レナ「機械の弱点と言えばやっぱり何か核のようなものがあるはずよね。」

機械の中心部に大きな赤い核のようなものが見える。

ビュンビュン！

触手がたくさん襲ってくるのを避けレナは機械の中心部に瞬間移動する。

レナ「終わりよ！」

レナが念力破を放ち核を破壊しようとする。

ドガン！

レナ「やった．．．．．かな？」

スドオオオン！

核の部分から念力破が放たれレナに当たる。

レナ「きゃあああ！」

レナは地面に倒れ込む。

さらにそこに触手が襲い掛かり、レナを攻撃していく。

ドガ！ドカ！ドガアアア

しかし、そこにレナはいなかった。

レナ「私がこのくらいでやられるわけ無いでしょ！！！」

レナは瞬間移動でなんとか触手の攻撃を避けていた。

しかし、機械から受けた念力破のダメージと瞬間移動の使用によりかなり体力を消耗していた。

あの機械の核を破壊しない限り倒すことはできない。でも念力破は効かない。こうなったら！

レナは瞬間移動をして空中に現れる。

そこへ触手が襲い掛かると、レナは瞬間移動を利用して触手を核の前に持つてくる。

この触手が核に当たれば多分この機械も破壊されるはず！

しかし、触手は核の直前で攻撃をやめる。

さらに、核からの念力破の攻撃がレナを襲う。

レナ「そんなんっ！」

ドガアアアア！

レナはその念力破をなんとか避ける。

レナ「私が負ける訳にはいかない！私がやらなくちゃいけないの！」

レナの周りに念力が漂いレナが青色に輝く。

レナ「はあああ！超奥義 復徠守叭韻ぶくらししゅほつりん」

レナの体が丸い念力の球体に包まれる。

レナ「これが私の超奥義よ！」

レナの体が徐々に回復していく。

触手はレナに襲い掛かるが、球体の表面に触れると突如触手の先端が消える。

レナ「私の超奥義でこの球体に触れたものは私の意のままの場所に移動させられる！」

消えた触手が核の目の前に現れ、止まらずに核を貫く。

ズドオオオオン！

バチバチッ！

ガーガガピガガガ！

ガガピーガ！

機械は電気を帯びて壊れていき、動かなくなった。

レナ「やったあ！私でもやれば出来るんだ！」



「じつしてレナの修行は終わった。」

発動！レナの超奥義！（後書き）

明日テストだ……………

ライナVS幽霊！？（前書き）

開きました、

## ライナVS幽霊!?

ライナの扉

ライナ「くっ・・・・・・・・」

ライナは苦戦していた。

幽霊らしきものは心理を読み取ろうとしても触れられない。

ライナ「どうなってんのよ!こいつ打撃は全く効かないし。」

打撃が効かないと考えたライナは念力破を幽霊に放つ。

ドガーン!

ライナ「やった!?!」

幽霊はまだそこにいた。  
ただ、ただ立っていた。

ライナ「なめんじゃないわよ!」

しかし、ライナは内心焦っていた。

(ヤバい・・・・・・・・・・打撃も効かないし、念力破も私のが  
弱いのか通じない。)

幽霊は素早い攻撃を繰り返して来た。

ライナは避けるすべもなく攻撃を受ける。

ライナ「きゃっ・・・・・・・・・・・・・・・・!?!」

ライナは全くと言って良いほどダメージを受けていなかった。

ライナ「こんなの効かないわよ!」

だが、いきなりライナに想像を絶する衝撃が体を駆け抜ける。

ライナ「きゃあああ!」

ライナは倒れ込み、幽霊はさらに体を貫く。

そして、またライナの体に衝撃が走る。

ライナ「いやあああ!」

ライナはダメージを受けながらも残る力を振り絞り立ち上がる。

ライナ「はあ、私が負ける訳にはいかない!私は昔からこの能力のせいで周りに嫌われていた。なのに・・・・・・・・・・私に手を差し延べてくれたアルカディア・サイコ。そして私にできた仲間」

ライナは念力を溜めていく。

ライナ「私はまた嫌われたくない!いや、嫌われてもいい!私は・・・・・・・・皆の足を引っ張りたくない!」

ライナの周りの念力が渦を巻きはじめる。

それは感情の高ぶり！

皆の足を引つ張りたくない、強くなりたい！

その向上心というべきものがライナの念力の力を覚醒させた。

ライナ「私にも出来る！超奥義 銃念間じゅうねんかんあつ亞」

ライナが手を銃のようにして構える。

ライナ「くらいな！」

指先から念力破が放たれる。

ドガーーン！

しかし、幽霊にはダメージは与えられない。

ライナ「ふん！私だって2回も同じことやる程馬鹿じゃないよ！」

ライナの指先から出された念力破と幽霊が繋がっていた。

ライナ「ここからあなたの弱点を探る。」

すると、幽霊が急に苦しみ出す。

ライナ「分かったわ！あなたの弱点はそこよ！」

ライナはまた指先から念力破を出した。

その念力破は幽霊の頭の部分に当たり、幽霊は光を発する。

パアアアアア！  
ズガガアアアア！

幽霊は消えて無くなった。

ライナ「修行クリア！やったあー！」

ライナは腕を上げて喜んだ。

ライナVS幽霊！？（後書き）

次はクリフの修行です。





## クリフの大発想！

クリフの扉

クリフは大きな鉄球に追いかけていた。

クリフ「俺のこと狙ってるみたいに転がってくるんだけど！」

ゴロゴロ！

鉄球はクリフの後ろにピタリとくっつくように後を追いかけてきていた。

クリフ「はあ、はあ、く……. 苦しい。や、ヤバい…….」

クリフにも体力の限界が近づいていた。

クリフ「ハアハア……. こうなったら！こいつをぶっ壊すかねえ！」

クリフは跳んで上からハンマーを振り落とす。

ドガーン！

しかし、鉄球はびくともしない。

ゴロゴロ！

クリフ「くそっ！くそくそくそ！ちつくしょ　　！！」

クリフは走りながら必死に打開策を考える。

（何か．．．．何か良い方法はないか？く、くそお．．．．もう体力が無くなってきた。このままじゃ、このままじゃ．．．．！！）

クリフは足元に念力を集中して一気に放出した。

ドン！

クリフが空中に飛び上がり天井にしがみつく。

クリフ「はあ、はあ、な、なんとか逃げたぞ．．．．．」

クリフはホツとしながらも絶体絶命のピンチに陥っていた。

この天井にしがみついたためには天井の刺のようにでた部分を掴んでいなくてはいけない。

クリフは腕のことを考えると後、10分が限界だった。

クリフ「どうすりゃあいいんだ！あんな化け物鉄球壊せるかよ！」

鉄球はまだ下で転がり続けている。

鉄球は何やら不振な動きを始めた。

（なんだ？どうしたってんだよ．．．．．）

すると、いきなり鉄球がバウンドを始めて天井を潰していく。

ドガツドカ!

クリフ「そんなのありかよ!? おいつ!」

クリフは驚いて、下に降りる。

そうすると、鉄球はまた下で転がっていた。

クリフ「ヤバい!」

しかし避けるまもなくクリフは鉄球に潰されてしまう。

ズドオオオオン!!

クリフ「なんとか、た、助かった………」

クリフは鉄球に潰される直前に念力破で穴を開けて、その中で鉄球を避けていた。

クリフ「こうなったら! 超奥義 質しつ煖な痛いた氣き刃は」

すると、体がゴムのようになり跳んでいく。

クリフ「これで、触った物体の性質を変えられるんだ!」

クリフは体を触る。

鉄球がクリフを押し潰すとクリフは鉄球にくっついていった。

クリフ「どうだ！俺の体を糊に変えてやったぜ！」

するとどんどん鉄球が溶けていく。

ドロドロ……………

クリフの前には先程まで鉄球だったものが転がっていた。

クリフ「やったあぜえ！どんなもんだい！」

クリフの大発想！（後書き）

今度これ終わったらコメディ―書きたい。

ロース過去との決別（前書き）

また投稿しました。

○（、）○

## ローズ過去との決別

ローズの扉

ローズ「なんで貴様がここにいるんだい？」

ローズとサイキックロボ　らしき者が睨み合っていた。

「その理由をお前に言う必要があるのか？お前の大事な相棒を殺したこの俺に！復讐してみろ！」

ローズ「僕の知ってるサイキックロボ　はそんなにベラベラと喋らない！」

しかし内心ローズは動揺していた。

目の前にいるのは紛れも無く愛しのヴィーナスを殺したあのサイキックロボ　なのだ。

ローズ「くっ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・！」

「喰らえ！このゴミがあの子の様に殺してやる！」

が念力破を出してローズを攻撃する。

ローズ「ぐわあ・・・・・・・・・・・・・・・・！」



ローズは攻撃を受けて後退りする。

「どうした？もう諦めたのか？あの時の様に不様になすすべもなく負けるのか？」

ローズ「さっきから聞いていれば！好き勝手に言ってくるね！」

「俺の言う通りだろ？貴様は無力だ。」

ローズ「なめないでくれるかな？僕を侮辱すれのは勝手だけどヴィーナスを侮辱するのは許さないよ！」

ローズは念力破をサイキックロボ に打ち込む。

ローズ「くそっ！こうなれば喰らえ！幻覚痺体能力！」

「うぐっ………！これが幻覚痺体能力か。確かに体が動かない。だが！念力破は撃てる！」

サイキックロボ は念力破をローズに向かって撃つ。

「どうだ？」

ローズ「馬鹿か？なんて醜い攻撃。」

ローズはそこに無傷で立っていた。

「なるほど幻覚か……。お前の位置をつかめない様にしたわけか。」

ローズ「どうだい？これで君の攻撃は当たらないよ。」

「だが貴様も俺を倒せはしないだろ？」

ローズ「なら面白いものを見せてあげよう。」

ローズの幻覚は解けて、は本物のローズが見えてきた。

「姿をさらけ出してまでやることだからさぞ凄いな。」

ローズ「見せてあげよう僕の超奥義 雷帝 怒奴騎！（らいていどぬき）」

ローズの後ろから雷でできた、巨人の様な物が現れた。

「なんだそれは？」

ローズ「これが僕の超奥義 雷帝 怒奴騎。皆の超奥義とは違いこの物体は僕の意味と同化して動く怪物。その威力は強力だ！」

ローズは構えをとり一気に殴り掛かる。  
すると、後ろの怒奴騎も同じ動きをして殴り掛かる。

ドガーーン！

サイキックロボ はかなりのダメージを受けていた。

「ぐっ………！ば、馬鹿な……な、なぜ!？」

ローズ「僕は今も過去に捕われているとでも？僕は強くなる。ヴィーナスのためにブラッティ・ネオを倒す！」

そして、サイキックロボ は砕け散った。

ローズ「僕の名は双翼の破壊の翼ローズ。再生の翼ヴィーナスの相棒さ。」

ロース過去との決別（後書き）

修行が激しいだろ！

＼（○）／

カイラ インザ クリアワールド(前書き)

14歳になりますたゞ

## カイラ イン ザ クリアワールド

カイラの扉

カイラと猛獣は睨み合って立っていた。

カイラ「いやいや、しかしでかいなこいつ。」

猛獣は唸り声をあげて今にも飛び掛かってきそうな勢いだ。

グルルルルル！

ヨダレを垂らして唸る猛獣は真っ白なシーサーのようだった。

カイラ「とりあえず、どのくらいのもんか試してみるか。このまま突っ立っててもラチがあかん。」

カイラは跳び上がって猛獣の後ろに回り槍で攻撃する。

ガアアアアア！

猛獣は攻撃に気づいて後ろを振り向きカイラに飛び掛かる。

カイラ「やべっ！」

カイラはそれを素早く避けて、違う地面から突き出た柱に着地する。

カイラ「デカイ割には素早いなこいつ。どうやら一筋縄ではいかな

そうだ。」

カイラは槍を構える。

猛獣はカイラの方を見ながら敵意剥き出しで牙を見せている。

カイラ「とりあえず、また攻撃するか。」

カイラはまた猛獣の近くに行き槍で攻撃するが、猛獣はそれを素早く避け足で踏み潰そうとしてくる。

ドガーーン！

カイラ「至近距離では俺の方が不利。なら念力破で遠距離を保つしかない！」

カイラはある程度の距離をとってから念力破を繰り返す。

カイラ「おらあ！」

すると、猛獣が口を開けて口から念力破の様なもの吐き出した。

2つの念力破はぶつかり合い消滅する。

カイラ「遠距離戦もできんのかよ！？こうなったら、俺の能力で近づくか。透明消音能力！」

すると、カイラの体はみるみる内に透明になり見えなくなった。

ガルルウ？

猛獣も不思議そうな顔をして辺りを見回す。

(へん！これならあの馬鹿でかい猛獣とまともに闘わずに倒せる。)

カイラが猛獣の後ろに立ち槍を構える。

猛獣は唸り声をあげるだけでこちらに気づいた様子は全くない。

(チャンスだ！)

そう思ったカイラは槍を突き出し猛獣に攻撃する。

ガラアアアア！

なんと！

猛獣がカイラ的位置を分かっていたかのようにカイラに向かい攻撃をする。

カイラ「ぐわあ……………」

カイラはなんとか石柱の上に着地する。

カイラ「なんで俺の位置が読まれてるんだ？」

猛獣は今にも飛び掛かってきそうな勢いでこちらを見つめている。

カイラ「まさか?!」

猛獣が鼻を異様に動かしている。

カイラ「臭いで俺の位置を把握してるのか？」



カイラはため息をついた後、少し深呼吸をして、槍を構える。

カイラ「いくぜ！超奥義 クリアワールド！」

すると、カイラの周りからどんどん景色が透明になっていく。

猛獣も後退りをして不思議そうな顔をしている。

カイラ「こつちにおいて猛獣ちゃん！」

カイラは姿を現し猛獣を挑発する。

ガルルウ！

ガラアアアア！

猛獣は一瞬ためらったがカイラに襲い掛かった。

カイラ「きなきな！」

カイラは猛獣をおびき出す様に逃げる。

カイラ「ここでどうだ！死ね！」

カイラは槍の柄を地面に突き立てる。

バシユシユシユシユ！

カイラのクリアワールドが無くなり、また石柱のフィールドに戻った。

カイラ「バイバイ！猛獣ちゃん。」

猛獣の下は石柱がなく、猛獣は下へと真っ逆さまに落ちていった。

カイラ「ふう．．．．．死ぬぞこりゃ」

カイラ インザ クリアワールド(後書き)

いや〜冬だね”

寒いよよよ( ^ \_ ^ )  
{ { { ( : : )  
{ { {

生死の力！究極奥義 神王波（前書き）

やっとの投稿”

生死の力！究極奥義 神王波

昇の扉

薄暗い部屋の中で昇は何かと向き合っていた。

昇「なぜ！？お前がここにいるんだ！」

昇が言葉をかけると、それが答える。

？「少しお前の中から抜け出してグリーテに頼んだんだ。貴様を倒すためにな！」

昇「くっ！そういうことか、サイトリコ！」

そこにいたのは白銀の鎧を身に纏った第三時の鬼人サイトリコだった。

サイトリコ「覚えていたか、無論忘れていたとは思っていないが。時は不思議なものだ。例えばどんなに印象深いことも時と共に薄れる。

昇「何がいたい……………？」

昇がサイトリコを睨みつける。

サイトトリコ「今の貴様には気迫がない。あの時、私を倒した時の前はそんなものではなかった。」

昇「なら、試してみる！俺の力を。超奥義 超念体光術！」

ボワアアアアア！

昇の体を光が包み、髪の毛が少し逆立つ。

サイトトリコ「力は使えなくては意味がない。例え、どんなにその力が強くとも。」

サイトトリコはじっと動かずにこちらに向かって立っている。

昇「この前のグルーとの闘いでは、この技の真価を見せてない！見るがいい。超念体光術 爆型！」

すると、昇の目が赤く光り輝く。  
その瞬間！

凄い速さで移動してサイトトリコの後ろに回り込む。

サイトトリコ「なに！？」

昇「くらええええええ！」

昇は巨大な念力破をサイトトリコに撃ち込む。

ドガアアアアア！

物凄い爆風が吹き荒れて昇も吹き飛ばされる。

昇「や、やったのか？」

昇が砂埃の中を目を凝らして見ていると影が現れる。

昇「チツ！まだ駄目か。さすがに簡単には倒せないな。サイトリコ  
.....」

砂埃の中から現れたサイトリコは口を開けて口から念力破を繰り出す。

昇「なんだと!？」

昇が素早くそれを避けると、サイトリコの姿が消えていた。

サイトリコ「馬鹿め！貴様はすぐに惑わされ過ぎなんだ。」

サイトリコは昇の背後に回り手で昇を弾き飛ばす。

ズガアアアアア!

昇「ぐわあああ！」

昇は倒れる。

サイトリコ「どうだ？これでもまだ言えるか？力が使えていると。」

サイトリコは昇に問い掛ける。

しかし、昇に返答はなくその場に倒れ込んでいるだけ。

サイトリコ「なんだそのまねは？熊じゃあるまいし。死んだふりが通用するとも？」

すると、昇は笑い出し言う。

昇「これでも力は使えてないって言えるか？」

サイトリコ「なんだと？どういう意味だ！？」

サイトリコが昇を見つめていると、昇が立ち上がった。

昇「どうだい？」

サイトリコ「き、貴様！その瞳は！？」

昇の瞳が赤から青にと変わっていった。

昇「これが超念体光術 静型。今までの赤い瞳の時は攻撃の爆型。そしてこれは絶対防御の青い瞳静型。」

昇の周りが青い念力に包まれている。

そして昇は無傷の状態でその場に立っている。

サイトリコ「ふん！いくら攻撃を守っても貴様の攻撃は効かない。なら、勝ち目はない！」



サイトリコが攻撃しようと手を振り上げる。

昇「それはどうかな？」

昇は瞳を赤くして、凄い速さで攻撃を避ける。

昇は後ろに回り込み、念力破を背中に撃ち込む。

サイトリコ「無駄なことを！何度やっても効かんわ！」

サイトリコが後ろを向き叫ぶ。

すると、サイトリコの体が動かない。

サイトリコ「な、なんだこれは……………?」

昇「しばらく動けない。体を麻痺させるような念力破を撃ち込んだからな。」

念力破には属性と呼ばれるものがある。

ほとんどの超能力者は無属性の念力破を使っている。

しかし、念力破は麻痺、毒、氷結などいろいろな属性がある。

サイトリコ「な、なるほどな……………だが動けなくなったからといって何になる？」

すると、昇は腕を構えると瞳を閉じた。

昇「右手に生の力を！左手に死の力を！」

その掛け声と共に昇の右手には青い光が、左手には赤い光が集まる。

サイトリコ「ま、まさか!?あの技をやる気が!や、やめる!」

昇「びびってんなよ!今から地獄に送ってやるからよ。」

昇の両手にはかなりのエネルギーが溜まっている。

昇「俺の麻痺属性の念力破が解けるまでもう時間がない!まだ、半分も溜まってないが仕方ない!」

昇の両手のエネルギーが圧縮される。

昇は両手を前に突き出した。

昇「いくぜえええ!究極奥義 神王波しんおうは!」

昇の両手から一気にエネルギーが放出される。

その赤と青のエネルギーは合わさり一筋の光となり、サイトリコにぶつかる。

ズガアアアアア!

バシューーーーーー!

辺りが光に包まれ、昇は下に倒れる。

昇「どうだ.....見たか。サイトリコ。」

爆発がおさまり、サイトリコは消えていた。

昇「サイトリコ!お前があれで死にはしないだろうが!出てこい!」

昇はサイトリコを探す。

すると、どこからともなく声がする。

サイトリコ「よくやったな。昇。」

昇「サイトリコ！」

昇は辺りを見回す。

サイトリコ「今は俺はお前の中から喋りかけている。」

昇は胸に手を当てる。

サイトリコ「お前の修行は合格だ。グリーテに頼んでおいた甲斐があった。まさかここまで強くなっているとはな。」

昇は少し照れていた。

サイトリコ「とりあえず、俺はしばらく休む。ブラッティ・ネオと闘う時には協力する。そして、これはまだ分からないが……お前の近くに鬼人の力を感じる。」

昇「な、なにっ!？」

サイトリコ「まだ分からないことだ。しかし、気をつける。」

昇は頷く。

サイトリコの声は聞こえなくなった。

昇の修行終了。

生死の力！究極奥義 神王波（後書き）

寒いのは嫌いだ！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3575x/>

---

僕は明日を知らないようで知っている

2011年11月20日19時49分発行